私これでも魔道師ですが？

羽後響

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私これでも魔道師ですが？

【Ｎコード】
Ｎ２２０８Ｚ

【作者名】
羽後響

【あらすじ】
平凡な中学生の「川上麻里香」はとんでもないかたちで幼馴染「平沢可奈子」と再会する。
だが、可奈子は魔道師学校の生徒であった。
母も魔道師だったことを聞かされた麻里香も、魔道師学校へ入学することになってしまった。

第1章　私これでも凡人ですが？（前書き）

偶然書いてみました。
できれば「こうしてほしい」、「～の字が間違っている。」などのコメントをいただきたいと思っております。
こういうの書くの初めてなもので・・・

第1章　私これでも凡人ですが？

「どうしよう・・・間に合うかな？」

真夜中の月に照らされながら、真っ暗な住宅街を走っていく少女がいた。
名前は「川上麻里香（かわかみまりか）」。中学2年生だ。
小柄で、色白、茶色い髪をツインテールにしている。

最新ゲーム機を買うために並ぼうと、電化製品店行く最中だった。

突然、
ズバッ！！という大きな音が聞こえたと思ったら、
「うがっ！！」っと声をあげながら女性が目の前に飛んできたのだ。

「きゃっ！！」
麻里香はびっくりして悲鳴を上げた。
何とその女性は大量に出血していたのだ。

「大丈夫ですか！？」と女性に声をかける。

苦しそうに女性は目を開けて、
「うっ・・・早く逃げないと・・・またあいつが・・・」

麻里香はこの女性が、なにか犯罪に巻き込まれたのかと思い警察に連絡する。
警察が2人すぐに駆け付けたが、女性は
「来てはだめ！！もうあいつがそこまで！！なっ！？」

ズバッ！
麻里香はさっき聞いた音だと気付き、振り向くと警察が2人ともいなくなっていることに気がつく。
「え・・・？何が起きたの？」
驚いた表情を浮かべる麻里香に誰かが近づく。

バキッ！！
鈍い音が響く。
麻里香が振り向くと、さっきの女性が突然現れた化け物の刀を真っ二つにへし折って、
「これ以上近づくな！次は確実に殺す！！」
とさっきまで倒れていた彼女とは思えないような恐ろしくどすの利いた声で威圧すると
男は何も言わず一瞬で消えた。

「大丈夫だった？」
女性が近づいてきて気遣うが、麻里香にとっては聞き覚えのある声だった。
「あれ？もしかして、可奈子？」

「え・・・？麻里香だったの！？」
二人は知り合いだった。
というより、幼馴染だった。
名前は「平沢可奈子（ひらさわかなこ）」。
外見は長身で金色のロングヘア。
小学4年の時に大きな事故に巻き込まれて、治療のために外国へ行ったということしか聞いていなかった。

「ところで、可奈子。さっきのが何だったのか説明してくれるよね？」

「うん。でも、明日でいいかな？ちょっとひどくやられてさ。」

「あ、そうだったよね。無理させてごめん。」

次の日、可奈子は麻里香の家にやってくる。
ピンポーン
「あらどなたかしら？」
麻里香の母が出てくる。
「お久しぶりです。可奈子です。あの、つまらないものですがこれどうぞ。」

「あら、可奈子ちゃんだったの！？去年以来ね。上がって。」

「その前にお母様。お話があります。」

「あら、どうしたの？かしこまって。」

「実は、麻里香にーあれーを見られてしまって。」

「そうだったの・・・・そろそろ話す頃合いかもね。」

そう言って2人で麻里香の部屋に入った。

「あ、麻里香。昨日のことちゃんと話しに来たの。」

「可奈子・・・でも、なんでお母さんまで？」

「実は、お母さんも関係あるのよ。」

そしてあの化け物についての話を始める。

「実は、昨日のあれは人が魔道師としての力に溺れてしまったなれの果ての姿なの。」

「は？可奈子・・・それ本気で言ってるの？てか、魔道師って何？」

「魔道師っていうのは特異な性質をもった人間のことで、言ってみれば魔法使いみたいなもの。

でも、その力は人それぞれなの。私で言うと敵の体力を吸収できる力で「アブゾーブ」と呼ばれているの。もうひとつは体を部分的に石化できる能力で「ペトリファクション」て呼ばれてる。

そんな感じの能力を使ってあの化け物を殺す仕事なの。夜行性だから、夜にしかいないけど。それと、事故があって転校したことになってるけど、今は魔道師養成学校在学中なの。」

「信じられない・・・」

麻里香は唖然とする。確かに自分の前で起きたことなのだから事実ではあるが、ファンタジーの世界でしか見たことのない「魔法」のようなものを使う人間が幼馴染なのだから。

母が声をかける。

「麻里香。あなたは気づいていないかもしれないけど、あなたはもう魔法を使えるの。私の能力を受け継いでるみたいで、おもに射撃系の魔法が使えるはずよ。だから、可奈子ちゃんとがんばってね！」

それを聞いて麻里香は気づいた。

「て、ことは・・・私、魔道師養成学校に行けってこと!?」

「そうです!」

麻里香の母と可奈子が見事にはもってうなづいた。

「あと、校長が可奈子ちゃんのお母さんだから、失礼のないようにね?」

そんなこんなで突然魔道学校へ転校となってしまった。

麻里香は未だに半信半疑のまま転入の日を迎えるのだった。

第2章　私これでも転入生ですが？

「麻里香！！朝だって言ってるでしょ！！早く起きなさい！！」

「う・・ん」

麻里香が目覚まし時計を確認すると、7時半を指していた。

「ねえ、お母さん？いつもどおりなのになんでそんなに焦ってるの？」

不思議そうに母の顔を見上げた。

「あんたねぇ・・・今日は転入日でしょうが！！」

「あ・・・・忘れてた。」

「いいから早くご飯食べなさい。」

そう。この日は麻里香の魔道師養成学校への転入日だった。

これからは寮生活になるため、昨日の夜遅くまで荷物をまとめていた。

「行ってきます！！」

いつもと何も変わりの無い様子で出ていく。

すると可奈子がバスに乗ってやってきた。

「おはよう！麻里香、ちゃんと寝た？」

「ま、まあね・・・あはははは。ところで、このバスどうしたの？」

「ん？これは学校が出してくれてるんだよ。場所が場所だから。」
魔道師養成学校は校長である可奈子の母が魔力で作った空間にあり、通常の人間たちでは立ち入りができないため、魔法を使い慣れていない新入学の生徒の家まで送迎用のバスを出していた。
「おう！乗ったか、ねーちゃん？俺は運転手の龍崎だ。よろしくな。んじゃ、行くぜ！！転送！！」
「う・・・うわ！！！！」
麻里香が驚きの声を上げるのも当然だった。
龍崎が転送と言った途端に全く違う場所にいたからだ。
「麻里香、大丈夫？今のが運転手さんの魔法なの。「ワープ」って呼ばれる魔法で、位置が正確にわかるところならどこへでも移転できるわ。」
可奈子がそう言うと、麻里香が気付く。
「あれ？移転できるなら別にバスじゃなくてもよくない？」
「いや、あのアレだよ。俺、昔はバスの運転手だったからさ。お、学校長のお出ましだぜ、ねーちゃん」
麻里香が外を見ると、そこには可奈子の母で、この学校の校長であり創設者「平沢実里（ひらさわみのり）が手を振ってこちらを見ていた。
急いでバスから降り、挨拶をする。
「平沢さん、お久しぶりです。」

「麻里香ちゃん、大きくなったわね。でも、こんなことになってしまってごめんなさいね。」

「いえ、私こそ可奈子に助けてもらって。感謝してます。」

「聞いたわよ。大変だったわね。あ、そうだ。早く荷物を寮に置いてこないとよ？ほら、可奈子案内してあげて。」

「うん。」

そして、２人で寮へ荷物を置きに行く。
この学校の寮は、男子寮と女子寮が校舎を挟むように立地されていた。

「あ、ここだよ。」
ドアに１０３と書かれた部屋の前で可奈子が立ち止まる。
中はとてもきれいに整理されているが、すでにいくつか荷物が置いてあった。
「えへへ。ごめんね。私と同室なんだよ。」

「え？そうなの？よかった！！いろいろ教えてね、先輩！！」
と、話していると放送が鳴る。
ピンポンパンポン。
「まだ寮にいる生徒に連絡します。もうすぐ授業が始まるので、急いで教室へ入るように。
繰り返し連絡します。・・・・」

可奈子が急に焦り始める。
「あ！！１時限目ロックベル先生の授業なんだ・・・。麻里香ちゃ

んはお母さんが校長室に来るようにって言ってたから。じゃ、行くね！転送！！」
「・・・魔法便利だねー。」
と麻里香は一人で呟いて、校長室へ向かった。
「失礼します。川上麻里香です。」
「あら、麻里香ちゃん。来てくれたのね。」
「ええ。あの、どのようなご用件で？」
「ええ。これから話したいことがあるの。魔法について。そこに座って。」
「わかりました。」
深刻そうな表情を浮かべながら実里が話し始める。
「これからここで学ぶ魔法がそもそも何のためにあるのかを先に言っておくわ。黒魔道師と呼ばれる魔道師を駆逐するためよ。」
「え・・・？駆逐？」
「そう。魔法は大きく分けて４種類あるわ。通常魔法、特殊魔法、補助魔法、黒魔法の４つよ。
通常魔法っていうのは、自分の魔力を放出したり、武器に付与したりするもの。あなたのお母さんはその部類よ。
特殊魔法は、肉体強化や自然の力、たとえば炎や水や雷なんかを魔力で扱うもの。可奈子がこの部類に入るわ。
補助魔法は、その名の通り味方の補助が主な仕事ね。
そして、黒魔法は、対象の精神そのものに働きかけてダメージを与

えるのが一般的ね。
その黒魔法だけを専門で使う者たちを黒魔道師と呼んでいるわ。」
「でも、なんで黒魔道師を駆逐するんですか？」
麻里香が尋ねると、さらに実里は険しい表情になりながら答える。
「黒魔法の資質を持っていながら気がつかないまま生活している人がいて、憎悪なんかの感情が強くなるとその拍子で暴走する場合があるわ。１度暴走すると感情が消えて、ただ魔法を使って人を殺し続けるだけの生きた屍になってしまうの。それを集めて世界を破滅へ導こうとしている組織があって、事実上それと戦うための戦力を養成するのが魔道師養成学校の目的よ。」

麻里香は茫然としていた。
今まで自分たちが普通に生きていたこの世界が、何とも知らない奴らに破壊されてしまうかもしれないという危機に瀕していたのだ。
その上、自分の来たこの学校がそれを止める唯一の手段であるなどと聞いて驚かないわけがないだろう。

すると、実里が声をかける。
「ごめんね、麻里香ちゃん。こんなことに巻き込むことになってしまって。でも、嫌ならまだ今なら転入を取り消すことだってできるのよ？どうする？」

「・・・・」

しばらく沈黙が続く。
だが、麻里香がその沈黙を破った。
「やります。魔道師になって、そいつらを止めて見せます。」

「麻里香ちゃん・・・。わかったわ。」
涙ぐみながら実里が答えた。

そして、麻里香はしばらく魔法の基礎を教わり、少し魔法を使えるようになった。

その日の午後、麻里香はクラス分けのための魔力テストと魔法実技テストを受けることになった。

この学校は、午前の授業は普通の学校と同じ授業を受け、午後に魔法の授業となる。

午前授業のみ学年別で行い、午後は魔力量ごとにAからEと最上級Sクラスに分かれて行う。
そのため、新入学の生徒は初日に必ず魔力量測定と実技のテストを行うのだ。

「それでは、はじめ！！」
いよいよ測定が始まる。
「んーーーーーー！！」
麻里香が右手を前に出してそこに魔力を集束し始める。
感覚的には体力テストで行う握力測定に近い。

「えりゃーーーー！！」
最後の力を振り絞って思いっきり魔力を放出すると、とたんに体の力が抜けて地面に倒れこんだ。
すると、

「ピーピー。魔力測定終了。推定魔力B。」という測定器の音声が鳴った。

「麻里香ちゃん、お疲れ様。でも、すごいわね。魔法初使用でいきなりB出る人なんてそうそういないわよ！！しかも可奈子と同じクラスよ！！」
と実里がびっくりするほどの魔力だった。

大抵、魔法初使用で測定するとEかD程度だからだ。

そして、実技に移る。
内容は、まず魔力資質特定。前に実里が行っていた「4つの魔法」のうちどれに当てはまるかを特定する。次に特定した資質に応じた試験、という感じだ。

「それじゃ、特定してみるわね。サーチ！！」
実里が麻里香に手をかざすと、持っていたパソコンに「通常魔法
遠距離および中距離型魔力砲撃」という字が現れた。特定が完了したということだ。

「これがあなたの魔力資質かぁ。あなたのお母さんと一緒なのね。」
と実里が言うと

「はい。母もそんな感じのことを言ってました。」と麻里香が思い出して言う。

そして、いよいよ本当の実技試験が始まる。

「遠距離および中距離型魔力砲撃」はその名の通り離れた相手を撃ち落とすのが主な役割だ。

なので、彼女に課せられた試験は遠方射撃、つまり的当てである。

「はじめ！！」

「ふっ！」

手を前に出し、意識を集中させ始めると手の先に歪な円形が形成され始める。

そして、人の顔ほどの大きさまで集束させると

「はあっ！！」

といって発射させる。

しかし、発射した魔力弾はとんでもない軌道を描いて消滅した。

「あれー！？当たんないけど！？」

と言いながら何発も打つが1発も当たらない。

「くっそー！！こうなったら、やってみるとしましょうか！？」

と言ってまた手を前に出す。

だが、今までと違うのは人の顔の大きさくらいで放っていた魔力をさらに集束させ続ける。

そして、とうとう自分の身長の2倍ほどはあろうかというような大きさまで集束させて

「今だ！！」

と思ったところで発射させた。

すると、直線状の魔力弾が着弾した位置こそ的から外れていたが、そこから爆発したかのように広がっていき、全ての的を飲み込んでいった。

「あれ？うそっ・・・」
バタッ
突然麻里香は倒れた。
どうやら魔力を使い果たしてしまったようだった。

目が覚めたときにはすでに寮のベッドの上で、時間は夜の7時だった。
可奈子は麻里香が起きたことに気付いた。
「まだ寝てなくちゃだめだよ。まったく、いきなりあんな集束型砲撃魔法なんて使うから体が持たなかったんだよ。」

「そっか。私、試験でどうしても的撃ち落としたくて、大きいの撃てば一気にいけるかなって思って・・・」

「そうなんだ・・・もう、無理しすぎだよ。あ、そうだ夕飯持ってきてるから一緒に食べよう？」

「うん！！」

そして次の日を迎えた。

この学校には1学年当たり20人ずつほどいて、これから麻里香が向かう2年生の教室には23人が在籍している。

担任は「宮道優衣（くどうゆい）」で、午前の教科は数学担当、午後は補助魔法担当だ。

「し・・・・静かに・・・・して・・・・くださ・・・・」
麻里香は、担任なのに随分と威厳の無い教師だなと思いつつ廊下で教室に入る合図を待っていた。
「じ・・・・実は・・・・転校生が来ました・・・・。ど・・・・どうぞ。」
そして麻里香が元気よく教室へ入ってくる姿を見て男子は「おお！！」と声をあげ、女子はその瞳を輝かせながら黙って見ていた。
「はじめまして。川上麻里香です。よろしくお願いします。」
拍手が鳴り響く。
こうして、ようやく無事に入学することができたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2208z/

私これでも魔道師ですが？

2011年12月8日23時48分発行